

|||||
書店関係者にお問い合わせページ

品切と在庫

||||| (株)京都ジュンク堂書店 平尾 繁忠 |||||

「この本は現在品切中のため、ご注文をキャンセルとさせていただきます。」

学生時代、卒業論文の参考文献を書籍部へ注文し、後日このようなご連絡をいただいたとき、「?」と思いました。当時における私の理解力不足も否めませんが、いまでも同じような疑問をお持ちになるお客様は少なくありません。「品切ならば、いつ補充されるのか?そもそも、『品切』とは何なのか?」当然の質問と存じます。「品切」という言葉は、それ単体では全く完結していない、非常に舌足らずな表現であり、業界用語とも呼べるものでしょう。「出版社に在庫が無く、取り寄せることが出来ない。重版時期も未定。」と理解できたのは恥ずかしながら、この仕事に就いてからのことです。

上記のケースは店頭販売・外商問わず、客注（お客様から店頭にはない本を受注し、それを何らかの形で取り寄せる）業務に関しましては必ず生じることです。私が所属する外商部は、客注のみで商売をしているといっても過言ではないでしょう。いずれにしても、一旦はご注文として承ったものを「お取り寄せできません。」と断るときは、非常に申し訳なく、歯がゆい思いをします。それが2,3年前に刊行された、比較的新しい出版物なら尚更のことです。

このようなお客様・書店双方にとっての悲劇をできる限り避けるためにも、弊社におきましては、たとえ出版社から「品切」と返答いただいた時も、それを即座にお客様へご連絡はいたしません。ご要望に何とでも応えられるよう、全国24店舗のネットワークを駆使して探求を続けます。それでもご期待に沿うことができない場合は致し方ありませんが、発見できたときは何事にもたとえようのない、望外の喜びを感じます。在庫が「秘宝」に生まれ変わる瞬間です。

現在、日本では年間7万点以上の新刊が発行されています。一日平均200点を超える本が書店に届いていることとなります。ここで、容量が3ヵ月分のところを容器をご想像下さい。毎日新刊を1点1冊ずつ店頭に並べるとしても、場所の都合上、古い200冊が押し出されます。つまり、出版社に返品されます（原則として、新刊の返品期限は3ヶ月です）。

しかし、そのサイクルを繰り返すだけでは、お客様にご満足いただける書店には成り得ません。ある程度時が経って（時代が追いついて）売れていく専門書や、息の長いロングセラーになっていくかもしれない本の中にはあります。たしかに新刊書は大事な商品ですが、はたしてそれだけで事足りるのでしょうか。1冊本を読めば、それに付随した他の本も読みたくなる、ということは人間の一般的な心理ですし、ある分野に興味を持てば、その古典的名著から気鋭の著者による最新の理論までを知りたいと思うのが真の知的好奇心なのではないでしょうか。それらを書店の棚で一望できれば、どれほど素晴らしいことか、想像に難くありません。このジャンルの網羅性・遍在性、なおかつ手にとって中身を見られる、その臨場感こそが、売れ筋の商品のみを置くコンビニや、キーワード等で検索しても多岐亡羊なデータしか得られないネット書店とは異なる、小売業の業態である書店としての生命線になっていくのではないかと私は考えます。

最後になりましたが、お客様にとって「あの店にならあるかもしれない」、「あの業者ならどこかの店に在庫を持っているかもしれない」と、頭の片隅に置いていただける書店になれるよう、今後とも専門書を中心にした品揃えで、店舗と外商の更なる連携をはかるとともに、長いスパンで販売を続けたく思います。

ひらお しげただ (外商部)